

# 水の文化を伝えていくために

東京農業大学長 進士五十八

## 文明と文化の違い

今、日本の社会での農業のウェイトは極めて小さく、農民人口は5%にも及ばないし、GDPで見ても2%ほどになってしまった。水も緑も土も、本来は農業に基本が置かれたものだが、農業を総体的に低く見る風潮になってからはどうもおかしくなってきた。「農」の意味は、農業すなわち生業(なりわい)としてだけで見るよりは、環境として、あるいは文化として、すなわち水・緑・土として見るのが大事だ。文化は、実にトータルなもので、またそうでなければならないということである。

文化(culture)は、もともと cultivate から来ている。耕し方は地方々々、場所々々でみんな違うということです。だから文明と文化は違うのです。この朝日新聞本社ビルの公開緑地には、美しくデザインされたタイル張りの水路が続いていますが、デザインはどこのビルにも共通するもので、それは、文明の流れともいえるものである。一方、すぐ近くにある江戸の初めにできた浜離宮庭園は文化の流れと言えるでしょう。

浜離宮庭園は潮入りの庭。江戸湾の水が自動的に入るようにして造られている。京都に始まった日本の庭園というのは真水で造ったが、東京には真水がない。そこで、海の水を使った。しかも、海水の特徴を生かすために、汐の満ち干きを利用した。それで潮入りの庭と称した。沢飛び、島に渡る飛び石を打っておくと、潮が満ちてくると渡れなくなる。遊び心を演出しているわけ。土地そのものに立脚した水のデザイン、あるいはその土地の生き物を生かしてつくられるデザインが大事。文化と文明のデザインは、ここが大きな違いです。

文化は、その土地々々の耕し方ですから、土地によって耕し方は違わなければならないというのが重要な点だ。緑と同じように、水にも文化と文明があるように思う。庭の緑と街路樹の緑の違いです。私としては街路樹も文化で、郷土性があってよいと思うのですが。

## わたしの原体験

私は、深川の木場で子供時代から結婚するまで住んでいた。しかし、私の原風景は、実は福井の越前平野、水田地帯のど真ん中。そこは疎開した場所。日野川という川があり、夏休みになるとこの河原に毎日のように水浴びに行く。その時の原体験は強烈だ。河原に砂利、砂地にまざって、アシやヨシが生えている。石の上を歩くと熱くてヤケドしそう。泥のところを歩くと、気持ち悪い。どろどろ、ぬるぬるという感じの気持ち悪さが、今ふりかえると懐かしい。こういう話、通じるでしょうか。「楽しく学ぶ」の根本は、学ぶというよりは、実は体験だと思う。

結婚するまで木場にずっとおりました。下町には、自然はないのだが、それでも雨という自然はある。我が家の雨どいから雨水が出て、そのといの先に小さな池ができる。その中の石と砂が小さな箱庭を作る。それがあふれ出て、オーバーフローは外へ、またもっと低いところへ落ちる。雨が降るなか私は一生懸命土手を築いて、水をもうちょっと貯めようと努力する。私は、庭をつくるということは、そういうことではないかと思う。心理療法で箱庭療法というのがある。患者が箱庭をつくると心が和んで、病気が治る。私は単なるいたずらで遊んでいただけだが、そこには庭づくりの原点があったように思う。

## 京都という土地と庭園

平安時代、京都に寝殿造り庭園ができた。宇治の平等院はその典型例で、極楽浄土を地上に再現する形で庭園とした。庭園史ではこう説明するが、その背景には自然立地の特徴があったと思う。

京都は三方を山で囲まれ、湧水がたくさんある。その湧水を使って庭園を造った。平安京ができる前、今二条城近く神泉苑は湿地だった。京都の真ん中で、湿地を埋めて、陸地を造る。深く掘って水を貯める池と、掘られた土を盛り上げ、高い土地をつくり、屋敷をつくるその池と、陸の境目には、石を積まなくてはならない。日本庭園は、ヨーロッパの庭園と全く違い、池の縁取りが自然の石でできている。これが独特の風景をつくっている。自然石を組み合わせる技術を発明した。このため世界で日本庭園は、非常にユニークなスタイルをつくっている。

つまり京都は、平安京をつくるために湿地を開発して、池と陸に分けて、その間の護岸に河原に転がっていた石を使い、生活環境を整備した。夏は暑くてしょうがないので、床下に水を流すという遣水（やりみず）を造った。北から水を落とす。京都は、北山から八条に向って傾斜がついている。昔の本を見ると、一条通の道路の高さと、一番南の東寺の五重塔のてっぺんの高さは同じだと書かれている。このため一つ一つの敷地では、その敷地の北側と南側に高低差ができる。そこで、敷地の中で滝を落とし池をつくって、これを水源に下の屋敷のまた滝が落とせるという勘定になる。棚田の原理と全く同じ。つまり、京都では水を上手に使いながら、排水もし、そして水の風景をつくりながら、又夏の暑さを和らげながら環境風景を造ってきた。なおかつそこには彼らが理想とする極楽浄土の風景を再現した。環境をデザインするというのは、実はそういうことだったのではないのか。

私は水の楽習は、環境教育同様特別に何か勉強するというものではないのではないのか。日常生活、行為の中に、そういう場を上手にセットすることで、何となくそれが学べるようにするのが本来の姿ではないかと思う。総合的学習の時間というのが来年からは本格的にスタートするが、せめてその中で、河原なり、山野なりに子供たちを放して、そこでそういう体験を思う存分できるようにすることが、実は一番楽しい学習機会になるだろう。

## 庭園からビオトープを見ると

庭園というのは狭い世界に、滝を落としたり、山を築いたり、流れを造ったり、池を造ったりする。自然地形の要素を全部とり入れている。狭い空間に実に多様な自然を或る種復元している。非常に狭い空間の中に高密度に多様な自然を造っているといえる。

最近、ビオトープという議論、生き物を取り戻さなくてはならないという機運がある。例えば蛍とかトンボとか、もっとたくさんの昆虫、野鳥へと話題が広がっている。生き物を都市に取り戻すにはどうしたらよいか。そのためには多様な空間をつくらなくてはならない。そこには水のある空間も必要、草原も必要、樹林も必要。しかも、それぞれが有機的に結びついたひとまとまりの風景になっていなければいけない。ところが、現代的機能本位のビオトープデザイナーは、“生き物”の条件からだけ見るので、まとまった全体風景として見るのがなかなかない。こういう草を食べる昆虫はこういうところから出るからといって、その昆虫が出るためには、そういう草を植えておけばいいということになってしまう。それは餌場ではあっても、本当の風景とは言えない。

何が言いたいかという、現代科学の細分化ということの問題だ。ここまで繰り返してきた総合体験

の重要性はここにもつながる。自分の体験であれば、すべての知識は自分の中で統合できる。ところが学ぶという、頭に単に知識を与えるという学び方では、実はその人の中で知識が総合されることはないのではないか。文化とは、もともとそういう意味でも統合された概念だった。そこには生産という行為もあるし、それを生かす生活という概念もある。さらに歴史も重なっている。人間が生きるために必要なありとあらゆることが文化といえる。

## 自然学習性

名主の滝という公園が王子にある。昔、私の恩師の井下先生が若い頃に名主の滝工事の監督をしていた時、ある庭師からこう言われた。「あんたは学校を出たから学校で勉強したのだろうけど、おれたちにも学校があるんだ、今度連れていってやるよ」と言われて行ったところがどこかという、奥多摩の御岳だった。そこに連れていかれて見せられたのは自然の滝。御岳駅から少し多摩川を下ると、いくつかの滝がある。その庭師は、ときどきその本物の滝を見て、滝のつくり方を勉強した。「これがおれの学校だ」という。

私が言いたいことは、実は自然学習性ということ。昔の造景、特に日本の造園技術を見ると、とことん自然風景から学ぼうとしたことがわかる。平安時代の後期から鎌倉時代の初期に書かれたと言われる「作庭記」という、世界でももっとも古いガーデンプックがある。「作庭記」には池の形、あるいは池の中の島の形、滝の落ち方などが、たくさんのタイプとして示されている。例えば滝だと布状に落ちるとか、白糸の滝のように糸状に落ちるとか、2段で落ちるとか、3段で落ちるとか、そういう細かい分類をおこなっている。つまり、大自然の風景をとことん観察して、それを最適の形で庭に再現するのである。再現に当っては、そっくりそのまま模型につくるわけではなく、アレンジし直す。熊本に水前寺公園があり、富士をつくっている。本当の富士山は、頂上があまりとんがっていないのに、谷文晁、葛飾北斎の富士は頂角がとがっている。イメージの中で、富士山はやはりそびえ立ってなくてははいけない。つまり、人間のイメージの中では、富士はすごくとんがった山だ。

つまり自然と人間の関係はこういうもので、自然自然と言うが、実は自然そのものではない。自分が何をどう思うか、人間だけがイメージというものを持てる、まさにこれは文化的存在だ。そこに人間のすばらしさがある。

人間はいろいろなふう自然を改造してきた。今は自然保護の人と、その逆の開発志向の人に、何となく二極分化、二律背反で対立するようにとられているが、私はそれは間違いだと思う。本来、本質と現実とは、両極の間にたくさんの段階がある。いま行動すべきは、どの段階にあるか、それぞれの場所にふさわしく判断するというこそ大事なことだ。にもかかわらず、白か黒かにした方がわかりいいから、みんながそういうふうにしてしまう。これは、本当に困ったものだと思う。

## 水の文化を伝えるまちづくり

私は木場で育ったが、小名木川、豎川、横十間川、いろいろと縦横に掘り割りがつくられていた。これがどぶ川になり、隅田川自身も随分臭くなってきた。ちょうど東京オリンピックの頃で、その頃から徐々に「川というものは臭い」ものだということになり、臭いものにはふたを閉める。さらに、ここには緑がない、都市緑化が必要という言葉が重なり合い、掘り割りの一部は埋めて植栽するようになっていった。

水面を埋めるのは大失敗だったと私は思っている。どぶ川は、いずれ努力すればきれいにできる。しかし、埋めてしまったら、川はなくなってしまう。私の考えでは、川というのはその地域の顔立ちをつくる輪郭線。私はこれを「都市河川座標軸」と呼んできた。東京の座標軸は隅田川であり、多摩川だ。緑の座標軸なら国分寺崖線、水と緑が重なるなら玉川上水。これが縦横に座標軸として、X軸Y軸で入って、そして東京という町がきちんと安定する。川がそのエッジになって、橋がそれをつなぐことは重要だ。大きな都市というものを一つ一つのディストリクトとしてちゃんと独立させてくれる。つまり地域性とか、地域の界索性といってもいい。ここは本所、ここは深川、あるいはここは越中島、ここは月島というように、その掘り割りや橋が、一つずつのエリアをまとめ、地域らしさにつなげる。住んでいる人間にとっては、それが何とも落ちつく。これが私の町だという実感を与えてくれる。はるか向こうまでずっと一面に灰色、モノトーンで展開する大東京は、ヒューマンスケールをはるかに超えていて、都民にとってこれが私たちの町かしらと思わせてしまう。分節化がコミュニティ意識を与える。

昔、三島のまちづくりを手伝った。「三島女郎衆はノーエ」という農兵節の発祥の地。三島大社という立派な社があるが、三島大社から三島駅の間にごぶ川があり、これを何とかきれいにしたいという相談がたまたま市民グループからあり、また、もう1つ、ちょうど新幹線が通り、東海道側の昔の三島の宿の方が、少し廃れかけていた町の活性化をも目指さなければならなかった。「三島は水の都なのだから、三島の駅前にでっかい噴水を上げたい」という相談があった。1年を通じて勉強会をするというので行った。JCのグループ。それから市民サロンの、JCのOBグループ。彼らは、それまでは東京から落語家呼んで、落語を聞く夕べとか、酒を飲む会とかをやっていた。

たまたま「伊豆の踊子」を撮った映画監督の五所平之助さんがおり、五所さんは、東京生まれだったが、ロケに行って、三島の水の美しさにほれ込んで、三島に引っ越した。それなのに、今の三島はひどいものだとぼやいていた。というのは、新幹線の上側(北)に大きな工場ができ、伏流水をくみ上げてしまった。その結果、楽寿園という名勝指定の宮家の庭園さえ、その池の水も枯れてしまっていた。その隣の白滝公園も菰池公園もみんな湧き水の公園だが、これがだめになる。水が出なくなったので、ここから流れる水上もどぶ川になってしまった。そういう状況の中で五所さんは、昔はよかったと毎回こぼしたという。若いJCの人たちは、「先生もう一回昔のようにしようじゃないか、そのすばらしい思い出を映画にして欲しい」ということで500万円の金を集めて、天下の名監督に映画をつくってもらった。これが、「わが町三島」という映画。私は、この映画こそ、皆さんに是非見てほしい。20〜30分の映画だが、三島のかつての美しい水の風景を映画の中で再現している。ドラマチックな映画ではなく、淡々と叙情的な映画。それを市民が見て、「そうだったよね」ということになり、市民リード型の町づくり運動が盛り上がり始めた。

あとで、私は初めて柿田川に行った。狩野川の支流で、富士の湧水がそこにわき出している。本当に涙が出るほど清冽だ。とにかく冷たいが、川底では砂がわき上がり、本当に水は生きているという感じ。私は本当に水は最高だと思った。つまり本当に美しい水は、忍野八海でも全国水の名水を訪ねてもみんなそうだが、涙が出る。自然に飲みたくなる水、水の中に入りたくなるのが本当だ。そういう意味ではどんなに立派に水道ができて、涙は出ない。本当の湧き水、柿田川の水を見ると、涙が出る。これが本当だと思う。だから最終的には、知識を学ぶ以上に、私は原風景、子供のころの原体験、そういう豊かな水空間とどのくらい触れ合えるかということ、これに尽きると思う。ついすくって飲みたくなる

ような水、湧き出る姿を眺めていると、じーんと来るような水体験をどうやって与えることができるか。今は残念ながらそれが名水 100 選というように、日常空間にはあり得ない特別のものになっている。かつては日本のどこへ行っても水空間はあった。だから本来は、特別に新しい水空間をつくるというよりは、むしろそういうごく日常的な水空間との係わり方をもう一回顕在化させること。そういう環境をどのようにつくるかが実はいちばん大事ではないか。

明治期、舟運や発電などいろいろな機能を果すべく、京大の学生田辺朔郎が卒論研究で琵琶湖疎水を提案し、インクラインとして完成した。その時に彼は、ここに「愉楽」という言葉を加えている。つまり琵琶湖疎水を何のために通すかという、それは飲み水、浄水にもなるし、防火用水にもなるし、舟運にもなる。だけど、「愉楽」にもなる。公園の在界では昔から教化とか、愉楽とか、慰楽という言葉を使っている。こういうあまり法律用語になじまないような言葉—愉楽とか慰楽、あるいは後楽、そういう言葉の中にある楽しさというの、いま一度評価する必要がある。現代人はどうも理屈っぽくなり過ぎて、肝心なことを忘れてしまったような気がしてならない。そういう意味で、この楽しく学ぶという「楽習」を、もう一度体験の中から掘り起こすことが必要と思う。